B6-3

外傷性遷延性意識障害患者の経年的な体組成の比率変化ー第2報ー

○渡邉 幸恵[1]、川本 佑美[2]、西郷 典子[1]、水元 志奈子[1]、横山 知幸[1]
高橋 陽平[5]、草野 こず恵[3]、本多 和成[4]、梶谷 伸顕[6]

[1]独立行政法人 自動車事故対策機構 岡山療護センター 看護部
[2]独立行政法人 自動車事故対策機構 岡山療護センター 栄養科
[3]独立行政法人 自動車事故対策機構 岡山療護センター 薬剤科
[4]独立行政法人 自動車事故対策機構 岡山療護センター リハビリテーション科
[5]独立行政法人 自動車事故対策機構 岡山療護センター 臨床検査科
[6]独立行政法人 自動車事故対策機構 岡山療護センター 外科

【目的】外傷性遷延性意識障害患者の栄養管理において、体重設定をするにあたり体組成の変化を知る必要があると考え、体組成の経年的変化を追跡している。当院はBMIの－10～－15%が妥当と考えている。今回我々は、引き続き二年間の経年的な体組成の比率変化を検討したので報告する。

【対象と方法】期間は平成24年3月～平成26年3月で、男性35名、女性13名、平均年齢は男性33.5歳、女性47.2歳である。入院時BMIが－10%未満をA群、－10%以上－15%未満をB群、－15%以上－20%未満をC群、－20%以上をD群に分類し、体組成は、BIA(Bioelectrical Impedance Analysis)で測定した。対象項目として入院時、1年、2年後の骨格筋率、体脂肪率およびナスバスコアを用いた。

【結果】2年後は女性の症例が少なく男性のみ検討した。体脂肪率は男性群において、A、B群は1年後に上昇、2年後には減少し、C、D群は1、2年後とも増加傾向にであった。女性群ではA、B群で減少傾向、C、D群で増加傾向であった。骨格筋率は男性ではA、B群で1年後に減少し2年後はほぼ平衡、C、D群は1、2年後とも減少した。女性ではA、B群で増加傾向、C、Dで減少傾向であった。ナスバスコア重症度と骨格筋率は、重症になるほど有意な負の相関を認めた。

【考察】骨格筋率が経年的に追跡しても変化ないということは、生命維持の内臓筋のみとなっていると考える。ナスバスコアを改善する事が活動量の増加につながり、結果、骨格筋量の増加につながったと推測された。外傷性遷延性意識障害患者は、るいそう改善の為、安易に体重を増加させることは体脂肪率の増加、高脂血症につながるため、細かな栄養管理が必要であると考える。